

南部拠点地区遺跡群No.6

前橋市南部拠点東山区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書No.6

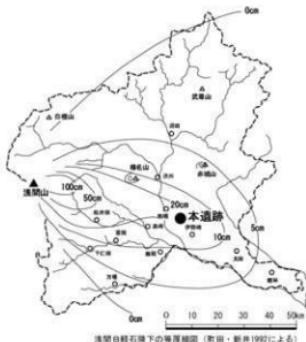
2011.9

前橋市教育委員会
株式会社ペイシア
有限会社毛野考古学研究所



南部拠点地区遺跡群No.6

前橋市南部拠点東地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書No.6



2011.9

前橋市教育委員会
株式会社ベイシア
有限会社毛野考古学研究所



調査区から櫛名山を望む



As-B 層下水田跡 畦畔の盛り上がり (南東から)



As-B 層下水田跡 区画 4 ~ 9 (北から)



As-B 層下水田跡 円形小窪み断ち割り (東から)



As-B 層下水田跡 区画 25 の水田面 (南東から)

序

前橋市は関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前から人々が生活を始めました。そのため市内のいたる所から、人々の息吹を感じることのできる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。また、続く律令時代になってからは總社・元総社地区に山王庵寺、国分僧寺、国分尼寺、国府など上野國の中核をなす施設が次々に造されました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられる厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地であり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する南部拠点地区遺跡群No.6は市の南東部に位置し、前橋南インターチェンジ一帯の土地区画整理事業に伴う発掘調査です。調査の結果、平安時代の天仁元年（1108年）の浅間噴火に伴う軽石に覆われた水田跡が発見されました。この水田跡は、高崎市日高遺跡に代表される日高条里との関連が考えられ、前橋・高崎台地に広く展開する貴重な条里制遺構です。

残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、この調査事業を円滑に進められたのは、調査発注者の株式会社ペイシア、調査受注者の有限会社毛野考古学研究所および各方面のご配慮の結果といえます。また、寒風の中、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんには厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

平成23年9月

前橋市教育委員会
教育長 佐藤博之

例　　言

1. 本書は、前橋市南部拠点東地区土地区画整理事業に伴う南部拠点地区遺跡群No.6 の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、前橋市教育委員会（教育長 佐藤博之）が主体となって実施し、調査業務は委託を受けた有限会社毛野考古学研究所が行った。調査担当者は、同研究所員の伊藤順一・宮田忠洋・有山径世である。
3. 発掘調査・整理作業期間は、平成23年3月7日～平成23年6月30日である。
4. 本遺跡は群馬県前橋市新堀町地内に所在し、遺跡のコード・面積は下記の通りである。

遺跡コード : 22G73　　面積 : 1,832 m²
5. 本遺跡に係る遺構測量に関しては、小出拓磨（有限会社毛野考古学研究所）が担当した。
6. 本書の編集実務は、有限会社毛野考古学研究所が行い、同研究所員の有山が担当した。
7. 本文の執筆については、I を神宮 聰（前橋市教育委員会）、II～VI を有山が担当した。
8. 調査に関わる資料は、一括して前橋市教育委員会文化財保護課が保管している。
9. 発掘調査・整理作業に携わった方々は下記の通りである。（順不同・敬称略）

〔発掘調査〕 小林隆一　設楽 高　清水宏通　白砂福造　閑口孝行　長野利章　福田公彦　藤田利一
矢内恵治　山城勝司

〔整理作業〕 小野澤絹子　合田幸子　水島美和子　伴堀りく
10. 発掘調査の実施から報告書刊行に至る過程で、下記の機関・諸氏の御指導・御協力を賜った。記して感謝を申し上げる次第である。（順不同・敬称略）

前橋市南部拠点東地区土地区画整理組合　株式会社ベイシア　山下工業株式会社　株式会社原田建総
J T 空撮　坂口　一

凡　　例

1. 採図における座標値は世界測地系（国家座標第IX系）を使用した。方位記号は座標北を示す。
2. 等高線や遺構断面図における水準値は海拔標高を示す。単位はmである。
3. 本書掲載の遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は、各採図中にスケールを付した。
4. グリッドは、原点(X=37,300-Y=67,400)より西から東へX 0、X 1…、北から南へY 0、Y 1…と付した。
5. 遺構断面図に示した色調は『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修 2006)を使用した。
6. 本書ではテフラの呼称として次の記号を用いた。

As-A : 1782 (天明3) 年に噴出した浅間A軽石。 As-B : 1108 (天仁元) 年に噴出した浅間Bテフラ。
Hr-FA : 6世紀初頭に噴出した榛名一二ツ岳浪川テフラ。
7. As-B層下水田跡計測表に示した計測値の()は復元推定値を表す。
8. 水田の計測は畦畔の下端で行った。面積はアーニメーターで3回計測し、その平均値を採用した。
9. 本書掲載の第1図は国土交通省国土地理院発行1/200,000「長野」・「宇都宮」、第2図は同発行1/25,000「前橋」・「高崎」、第3図は前橋市都市計画図1/2,500を一部改編して使用した。
10. 表紙には『昭和61年航空写真集前橋市全域』の空中写真を使用した。

目 次

| | | | |
|-------------|---|--------------|----|
| 卷頭写真 | | III 調査の方法と経緯 | 4 |
| 序 | | IV 基本層序 | 4 |
| 例言 凡例 | | V 遺構と遺物 | 5 |
| 目次 | | 1 遺跡の概要 | 5 |
| I 調査に至る経緯 | 1 | 2 As-B層下水田跡 | 6 |
| II 遺跡の位置と環境 | 1 | VI まとめ | 12 |
| 1 地理的環境 | 1 | 写真図版 | |
| 2 歴史的環境 | 2 | 抄録 奥付 | |

挿図目次

| | | | |
|-------------------|---|----------------------|----|
| 第1図 遺跡の位置 | 1 | 第7図 As-B層下水田跡 畦畔 | 9 |
| 第2図 周辺の遺跡 | 3 | 第8図 As-B層下水田跡 水口 | 10 |
| 第3図 調査区位置図 | 4 | 第9図 As-B層下水田跡 足跡・小塙み | 11 |
| 第4図 基本層序 | 4 | 第10図 本遺跡周辺のAs-B層下水田跡 | 13 |
| 第5図 全体図 | 5 | 第11図 As-B層下水田面の状態 | 14 |
| 第6図 As-B層下水田跡 平面図 | 8 | | |

表 目 次

| | |
|------------------|---|
| 第1表 As-B層下水田跡計測表 | 7 |
|------------------|---|

図版目次

| | | | |
|----------------------|--|------------------------|--|
| 卷頭写真 | | 図版 3 | |
| 調査区から棲名山を望む | | As-B層下水田跡 東西南北畠全景 | |
| As-B層下水田跡 畦畔の盛り上がり | | As-B層下水田跡 東西南北畠全景 | |
| As-B層下水田跡 円形小塙み断ち割り | | As-B層下水田跡 南北畠近景 | |
| As-B層下水田跡 区画 4 ~ 9 | | As-B層下水田跡 南北畠近景 | |
| As-B層下水田跡 区画 25 の水田面 | | As-B層下水田跡 南北畠近景 | |
| 図版 1 | | 図版 4 | |
| 調査区全景 | | As-B層下水田跡 区画 14 足跡検出状況 | |
| As-B層下水田跡 | | As-B層下水田跡 区画 13 足跡検出状況 | |
| 図版 2 | | As-B層下水田跡 足跡近景 | |
| As-B層下水田跡 区画 12 ~ 14 | | As-B層下水田跡 足跡断ち割り | |
| As-B層下水田跡 区画 20 | | As-B層下水田跡 南北畠断面 | |
| As-B層下水田跡 南北坪境畦畔 | | 基本層序 | |
| As-B層下水田跡 水口 2 | | 作業風景 | |
| As-B層下水田跡 水口 3 | | 作業風景 | |

I 調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋市南部拠点東地区土地地区画整理事業に伴い実施された。平成 23 年 2 月 21 日付けで株式会社ベイシア代表取締役 赤石好弘（調査発注者）より埋蔵文化財発掘調査依頼が前橋市教育委員会に提出された。すでに実施された範囲確認調査によれば平安時代の水田跡が確認されていることから現状保存を依頼したが、開発が避けられないとの回答を得た。発掘調査の必要が生じたが、市教育委員会直営事業での実施が困難なため、民間発掘会社への発注を依頼した。市教育委員会作成の仕様書とともに、ベイシアから各発掘調査会社に見積書の作成を依頼し検討した結果、有限会社毛野考古学研究所 取締役 長井正欣（調査受注者）に決定した。なお、3 月 1 日付けで市教育委員会（指導・監督機関）とベイシア、毛野考古学研究所間で協定書を取り交わした。発掘調査委託契約については、協定書と同日付けで株式会社ベイシアと毛野考古学研究所との間で埋蔵文化財の発掘調査委託契約を締結し、3 月 7 日から発掘調査を開始した。

なお、遺跡名称「南部拠点地区遺跡群No.6」（遺跡コード：22673）の「南部拠点地区」は区画整理事業名を採用し、数字の「No.6」はすでに実施した調査と区別するために付したものである。

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

本遺跡は、前橋市南東部に展開する前橋台地上の後背湿地に立地し、標高は約 76 m である。前橋台地は、利根川が赤城山・榛名山の間から関東平野に流出する部分に広がる緩傾斜の扇状地性台地である。浅間山噴火による山体崩壊（約 2 万年前）を原因とする「前橋泥流」が、利根川に沿って運ばれることで形成された。この泥流層は、全体的に灰色・黒色・赤色の角礫が混入し、黄褐色で縮まりが強い特徴を有する。前橋台地上には、河川・旧河川が北西→南東方向に流れ、各所に自然堤防や後背湿地が形成されている。本遺跡の近辺では、北西から南東側にかけて利根川、北東側に端気川が流下する。利根川は本遺跡周辺において前橋台地を貫流するが、前橋台地の北東側に位置する広瀬川低地帯から、天文年間（16 世紀）に洪水ないし人為的な改変により変流したものと想定されている。一方、端気川は利根川の支流に相当するが、かつては前橋台地北部の湿地帯に源をもつ自然路であった。この水源は、古墳時代から水田開拓に利用されてきたことが明らかにされている。



第 1 図 遺跡の位置

2 歴史的環境

以下では、南部拠点地区遺跡群と関連する古墳時代から中世の事例を中心に、周辺の成果を概観する。

古墳時代は数多くの遺跡が存在する。集落は微高地に占地するものの、時期ごとの変遷が著しい。前期は西善尺司遺跡（2）・徳丸仲田遺跡（4）・公田池尻遺跡（13）等で確認される。前期の集落は後期には水田化してしまうような比較的標高の低い土地に営まれることがあり、横手湯田遺跡（36）・横手早稲田遺跡（40）では周溝状の排水施設を伴う住居跡が構築されている。中期は横手湯田遺跡・横手早稲田遺跡、後期は川曲遺跡（9）・下佐鳥遺跡（10）・公田東遺跡（12）・公田池尻遺跡等で確認されている。

後背湿地では、火山灰や洪流水堆積物を鍵層として、様々な時期の水田跡が調査されている。周辺では、4世紀初頭のAs-C層下水田跡、4世紀初頭以降のAs-C混入土層水田跡・As-C混入土層上水田跡、6世紀初頭のHr-FA層下水田跡、6世紀中葉のHr-FP層下水田跡・Hr-FP泥流層下水田跡等が報告されている¹⁾。また、水田の開発に伴って水路や堰が整備されるようになり、多くの溝跡が調査されている。徳丸仲田遺跡では前期に開削された大溝が検出されており、下流の砂町遺跡（52）まで約2kmにわたることが見込まれている。

これらの集落やその生産活動を牽引したであろう有力者層の墳墓として、広瀬川右岸の自然堤防上や井戸川・鳥川流域に多くの古墳が集中する。これらは前期から後期まで継続して構築され、前期の元島名将軍塚古墳・前橋八幡山古墳・前橋天神山古墳、後期の金冠塚古墳（B）・總貫觀音山古墳等は、その規模や出土遺物等が卓越することで著名である。なお、前期には微高地の集落域に接して方形周溝墓が構築され、周辺では西善尺司遺跡・公田東遺跡・下瀧梅崎遺跡等で見受けられる。

奈良・平安時代には、律令制の導入と共に前橋市元総社町付近で国府が造営され、国分僧寺・国分尼寺が建立される。集落は前時代に引き続き微高地に占地し、西善鏡治屋遺跡（1）・西善尺司遺跡・徳丸仲田遺跡・徳丸高堰遺跡（5・6）・公田東遺跡・公田池尻遺跡・西田遺跡（20）・西田II遺跡（22）・西田VI遺跡（25）・鶴光路複橋遺跡（26）・鶴光路複橋II遺跡（27）・西横手遺跡群（42）等で確認されている。砂町遺跡では7世紀後半に造られた官道「東山道駅路」に推定される道状構造が見つかっており、近辺の一萬田遺跡では大規模な掘立柱建物跡・柵列等が確認されている。

後背湿地では、平安時代末期の天仁元（1108）年に浅間山の噴火で埋没したAs-B層下水田跡がほとんどの遺跡で検出されている²⁾。西田遺跡では微高地に営まれていた集落の上にまで水田開発が及んだ様子が窺える。これらの水田跡は一町四方の方格地割を採用した、いわゆる「条里地割」に沿うものが多い。

中世には、微高地に排水施設等の機能を有する環濠遺跡群が多数占地する。周辺では、室町時代の城郭跡である力丸城（a）、室町・戦国時代の宿阿内城（b）・新堀城（c）が著名で、力丸城は那波郡を支配する那波氏一族の居城、宿阿内城は那波氏の属城に想定されている。また、多くの遺跡で当該期の館跡、掘立柱建物跡・戸戸跡・墓等を調査している³⁾。方形に密集する西田遺跡の土壇墓群は特記されよう。

生産遺構として、利根川変流に伴う洪水等に起因する中世のAs-B混入土層水田跡、近世のAs-A層下水田跡が報告されている。これらの水田跡は前時期の条里地割を踏襲することが多い。水田跡の他に、洪水で埋没した島や復旧溝（灰搔き孔）等も散見される⁴⁾。

1) 古墳時代の水田跡が検出された遺跡 - As-C混入土層水田跡 : 4・5・12・13・18・20・43・44、As-C混入土層上水田跡 : 35・42・44、Hr-FA層下水田跡 : 2・4・12・14・20・28・32・34・36・37・40・41・42・43・44、Hr-FP層下水田跡 : 31、Hr-FP層下水田跡 : 36・40・42・43、Hr-FP泥流層下水田跡 : 39・41・43・44。

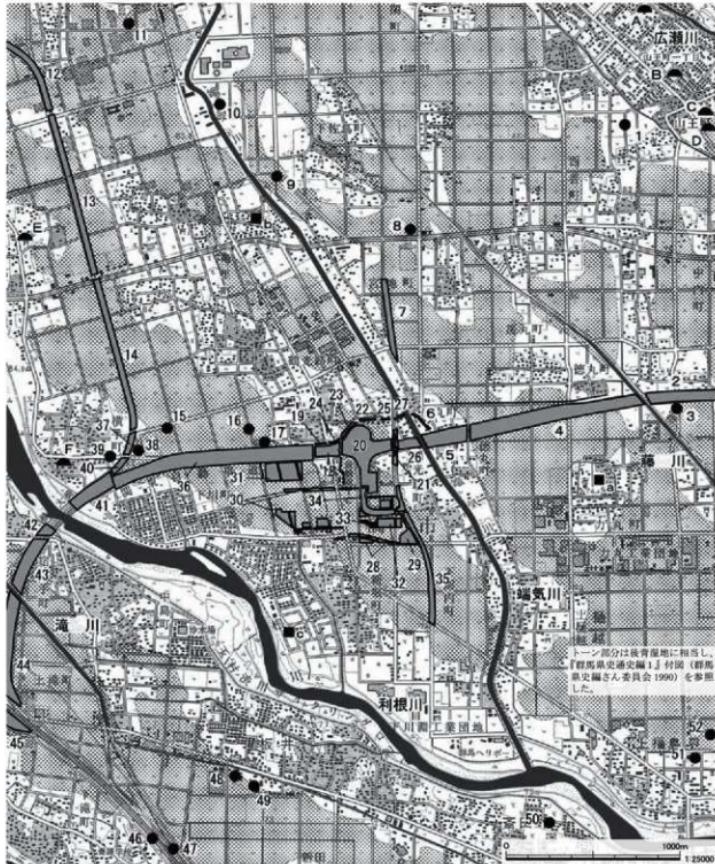
2) 奈良・平安時代の水田跡が検出された遺跡 - 道路 - 2・4・5・7・11・12・13・14・15・16・17・18・20・21・22・23・24・25・26・28・29・30・31・32・34・35・36・37・38・39・40・41・42・43・44・45・48・51・52。

3) 中世の遺構が検出された遺跡 - 道路 - 1・2・3・4・5・6・12・13・15・18・20・23・26・34・36・42・43・45・46、

舞堀土坑 : 2・41、土坑墓 : 2・5・14・18・20・26・35・42。

4) 中世の水田跡が検出された遺跡 - As-B混入土層水田跡等 : 12・13・14・23・36・37・38・40・41・43、

As-A層下水田跡等 : 12・41・42、復旧溝等 : 26・34・35・36・37・40・41・42・43・44・45・48・49。



- 1 西善尺司遺跡 2 西善尺司遺跡 3 西善尺司遺跡 4 徳丸仲田遺跡 徳丸仲田Ⅱ遺跡 徳丸仲田Ⅲ遺跡 徳丸仲田Ⅳ遺跡
 5 德丸高塚遺跡 德丸赤堀Ⅱ遺跡 6 德丸高塚Ⅳ遺跡 7 宮地中田遺跡 8 斎田遺跡 9 川曲遺跡 10 千佐烏道跡
 11 上佐鳥中原前遺跡 上佐鳥中原前Ⅱ遺跡 12 公田東遺跡 13 公田尻尻遺跡 14 龜里平塚遺跡 15 龜里鉢面遺跡 龜里鉢面Ⅱ遺跡
 16 亀岱油面Ⅱ遺跡 17 鶴光路神社遺跡 18 村中遺跡 19 村中II遺跡 20 西田遺跡 21 西田遺跡 西田Ⅳ遺跡 22 西田Ⅱ遺跡 23 西田Ⅲ遺跡
 24 西田V遺跡 25 西田VI遺跡 26 鶴光路模様遺跡 27 鶴光路模様Ⅱ遺跡 28 南部鶴見地区道路群№1 29 南部鶴見地区道路群№2
 30 南部鶴見地区道路群№3 31 南部鶴見地区道路群№4 32 南部鶴見地区道路群№5 33 南部鶴見地区道路群№6 34 下阿内町畠遺跡
 35 下阿内町田遺跡 36 横手湯田遺跡 横手湯田Ⅱ遺跡 横手湯田Ⅳ遺跡 横手湯田Ⅴ遺跡 横手湯田VI遺跡 37 横手宮山遺跡
 38 横手宮田Ⅱ遺跡 39 井戸山遺跡 40 横手早稲田遺跡 41 横手南川端遺跡 42 西横手遺跡群 43 横手三波川遺跡 44 上飛坂町北邊跡
 45 上飛五反畠遺跡 46 滝川B遺跡 47 上社社宮司遺跡 48 天神前遺跡 49 天神前II遺跡 50 田口下屋敷道路 51 金免遺跡 52 砂町遺跡
 A 亀塚山古墳 B 金冠塚古墳 C 文殊山古墳 D 阿弥陀山古墳 E 下川測3号古墳 F 間瀬神社古墳 a 力九城 b 鶴阿内城 c 新宿城

第2図 周辺の遺跡

III 調査の方法と経過

発掘調査は平成 23 年 3 月 7 日から同年 3 月 27 日にかけて実施した。発掘調査に際しては、調査範囲・廃土置場などを設定し、安全対策を講じた。調査は As-B 層下水田跡の検出を主目的としている。始めに、As-B 一次堆積層（Ⅲ層）上面までをバックホーおよびダンプを使用して掘削した（7～17 日）。その後、As-B 軽石の上位を鋤簍、水田上を移植ゴテで除去して、水田面を検出した（11～23 日）。24 日に全体清掃を行い、25 日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。空撮終了後から遺構測量を開始し、27 日に発掘調査を終了した。埋め戻しは行っていない。

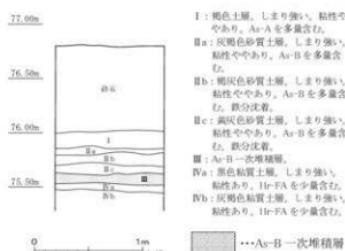
遺構の図化は、平面図はトータルステーション用い、断面図は手実測で行った。遺構図面は平面図を 1/100 縮尺、断面図を 1/20 縮尺で作成した。写真撮影は 35mm 白黒ネガ・35mm カラーリバーサルフィルム、デジタルカメラを使用し、調査の進捗に合わせて随時実施した。調査終了後、調査成果の整理作業、報告書作成を行った。



第 3 図 調査区位置図

IV 基本層序

調査区は後背湿地に立地しており、北西から南東へ緩やかに傾斜する。基本層序は以下の I ～ IV 層が認められた。I 層は現代の水田耕作土である。I 層の上には碎石が厚く盛られていた。II 層は As-B の混入層で 3 層に細分される。III 層は As-B 層で、最下部に薄い灰青色火山灰や粗粒の白色軽石が見られるところから、一次堆積層と判断した。調査区西側では 10 ～ 12 cm の堆積を確認している。IV 層は粘質土で、いわゆる「Hr-FA 混入土層」である。2 細分が可能で、IVa 層は As-B 層下水田耕作土、IVb 層は平安時代の洪水層起源と推測される耕作土に対比される。



第 4 図 基本層序

V 遺構と遺物

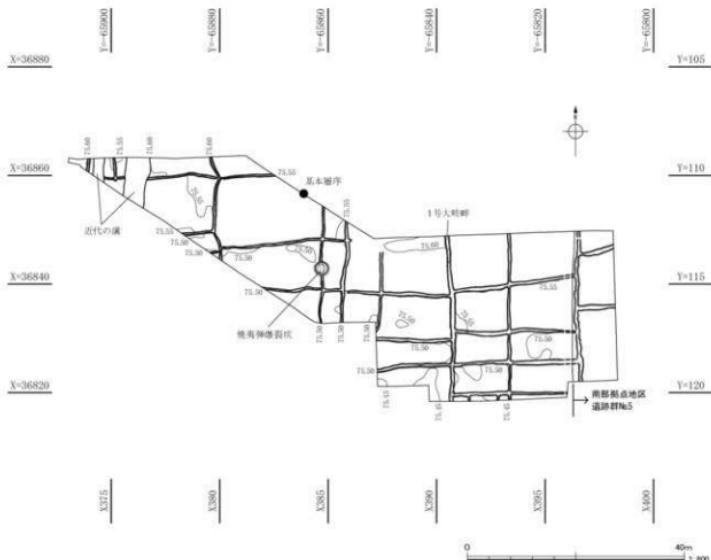
1 遺跡の概要

調査区内にはAs-B軽石(1108年降下)の一次堆積層が残存しており、その下から平安時代末期の水田跡が検出された。調査区の西側および南東側は、厚く堆積したAs-B軽石の一次堆積層によって水田面が良好な状態で保存されていた。一方、北東側はAs-B降下後の耕作等によって擾乱されており、As-B一次堆積層は残存していなかった。いわゆるAs-B混入土層(IIc層)の下面となるが、As-B層下面の相当層として扱った。畦畔は擬似畦畔として検出され、As-B層直下の水田との境は第6図に破線で示した。

水田区画は33区画を検出した。本遺跡を含む前橋南部地域のAs-B層下水田跡では、いわゆる「条里地割」に基づいた水田造営を行っていることが判明しており、本調査区内でも南北方向の坪境に相当する畦畔が検出されている。畦畔は南北・東西方向へ走行し、区画は概ね長方形を呈している。区画により、畦畔の高さや水田面の状態に異なる様相を見て取ることができた。

なお、近現代と想定される溝跡が2条、第二次世界大戦の焼夷弾爆撃坑が1ヶ所検出されたが、今回はAs-B層下水田跡の検出を主目的としているため、プランの確認のみで掘削は行っていない。

遺物は、表土掘削中に古墳時代前期の土師器台付甕の小破片、須恵器高台付壺・甕の小破片、近世の陶磁器片が数点出土したが、水田跡に伴う遺物は出土しなかった。



第5図 全体図

2 As-B 層下水田跡（遺構：第6～11図、第1表、図版1～4）

重複：近現代と想定される溝2条および掩夷弾爆裂坑と重複し、本水田跡が古い。

残存状態：調査区の西側および南東側は、As-B一次堆積層によって直接水田が覆われていた。厚さは西側で8～12cm、南東側で1～3cmほどあり、畦畔の頂部は削平される部分があるものの、水田面は良好に保存されていた。北東側は後世の水田耕作等によって搅乱されており、As-B混入土層下の擬似畦畔として確認した。

地形：北西から南東へ緩やかに低くなる。水田面の最高位は北西側の区画8で75.602m、最低位は南東側の区画27で75.443mを測る。北西から南東の比高は15cmである。

畦畔の走行と区画：畦畔は南北および東西方向へ走行する。概ね直線的であるが、区画4～10に係る畦畔は蛇行し、区画17・19に係る畦畔は南側で湾曲している。一町（約109m）方格地割の坪境に南北畦畔が検出され、1号大畦畔と呼称した。方位はN-1°-Wを指す。坪内の南北小畦畔は調査区内を全通する。方位はN-0～3°-EおよびN-2°-Wを指し、座標北に対する傾きは小さい。東西小畦畔は調査区内を全通するものはない。方位はN-83～89°-EおよびN-90～94°-Eを指し、水平ないしは北・南へ傾く。区画は33区画が確認されたが、全容が把握できるものは少ない。平面形は長方形を呈するものが多いが、畦畔の蛇行により形状が乱れる区画もある。規模は、南北軸が3.49～12.51m、東西軸が2.38～19.56mで、東西に長い長方形が多い。面積は、最小が区画13で30.0m²、最大が区画9で推定252.1m²である。比較的大形の区画が多いが、区画12～17や区画26～28のように、小形の区画も混在している。各区画内における水田面の比高は0.2～2.9cmを測る。平均は1.07cmで、湛水深は比較的水平に保たれていたと推測される。

畦畔の状態：1号大畦畔の幅は66～98cm、高さは削平を免れた南側で1～5cmを測る。小畦畔の幅は、南北畦畔が32～89cmで平均54cm、東西畦畔が29～109cmで平均63cmである。小畦畔の高さは、1号大畦畔の西側で高く残っており、南北畦畔が4～10cm、東西畦畔が4～7cmである。対して、東側では南北畦畔が0～2cm、東西畦畔が0～3cmで低く崩れている。畦畔の上には円形や不整形の小窪みが多数確認される。大半は後世の水田耕作に起因するものであるが、最下層に灰が認められるものもあり（第7図 土層断面C・L）、As-B一次堆積層によって埋没したものも混在している。なお、区画8の北壁断面（第7図 土層断面D）では、南北畦畔の東脇にAs-B軽石を二次的に包含する掘り込みが認められた。As-B降下後の水田耕作に伴う掘り込みと考えられるが、水田面上で止まっており平面では捉えられなかった。

水口：4カ所で確認された。水口1～3は東西畦畔の東端、水口4は東西畦畔の西端に設けられる。幅は、水口1が19cm、水口2が12cm、水口3が15cm、水口4が32cmである。勾配は全て北→南である。

水田耕作土：黒色粘質土で、粘性は非常に強い。層厚は3～6cmである。

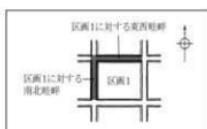
水田面の状態：水田面には小さな凹凸が無数に残っている。区画により違いが認められ、①凹凸が浅い区画（深さ1cm以下）、②凹凸が深い区画（深さ2～5cm）、③凹凸の深さが①と②の中間的な区画（深さ1～3cm）の3種類に大別される。①は区画1～11・14・16・17・19～21、②は区画24・25、③は区画12・13・26～28が相当する。凹凸は円形・楕円形・不整形を呈す小窪みによって形成されている。これらの小窪みは、長径9～17cmのものが多い。断ち割った数ヶ所に限っては、黒褐色の水田耕作土（IVa層）が小窪みと運動して変形していくことから、上からの押圧で形成されたものと判断した。また、人の足跡も多数確認されている。特に区画9～14で顕著だが、歩行を追えるものはない。水田面に残る足跡の深さは全体的に浅く、1cm未溝～2.5cm程度である。

遺物：出土しなかった。

時期：平安時代末期。

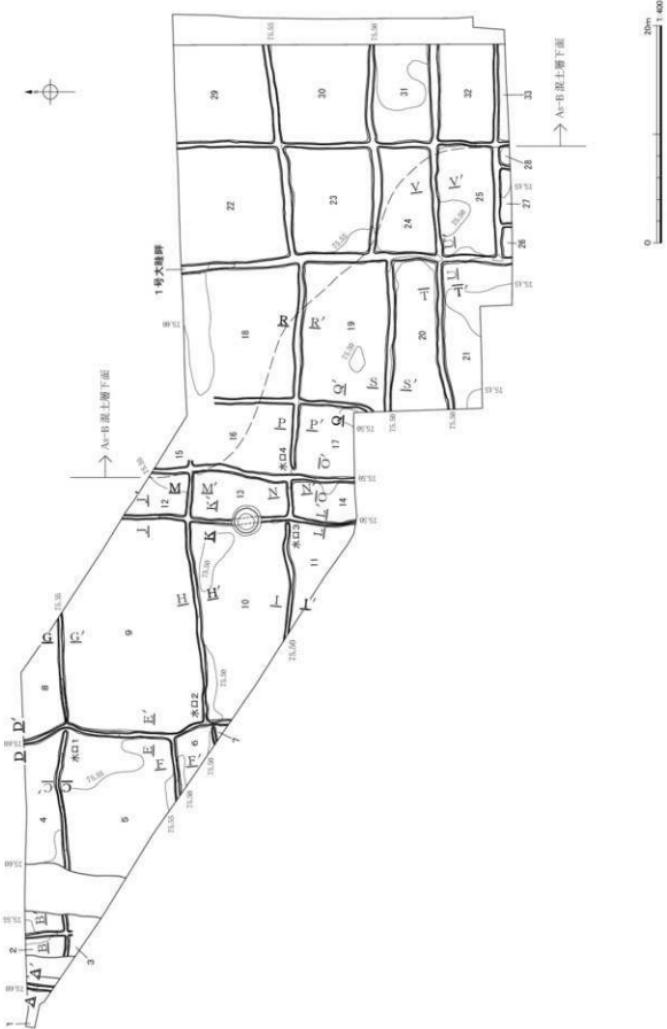
第1表 As-B層下水田跡計測表

| 区画 No. | 面積 (m ²) | 南北軸 (m) | 東西軸 (m) | 田面中央 標高 (m) | 田面比高 (cm) | 南北畦畔高 (cm) | 南北畦畔幅 (cm) | 東西畦畔高 (cm) | 東西畦畔幅 (cm) | 備考 |
|-----------|-------------------------|------------|------------|----------------|--------------|---------------|---------------|---------------|---------------|--------|
| 1 | — | — | — | 75.533 | 0.9 | — | — | — | — | — |
| 2 | — | — | 4.37 | 75.527 | 1.0 | 6～9 | 56～68 | — | — | — |
| 3 | — | — | — | 75.490 | 0.3 | — | — | 2～7 | 43～48 | — |
| 4 | — | — | 17.32 | 75.593 | 1.6 | 2～5 | 48～59 | — | — | — |
| 5 | (178.7) | 10.42 | (17.90) | 75.545 | 2.9 | — | 46～48 | 3～6 | 43～60 | 水口1 |
| 6 | — | 3.49 | — | 75.502 | 1.0 | — | — | 4～7 | 50～58 | — |
| 7 | — | — | — | 75.466 | 0.2 | — | — | 3～5 | 42～44 | 水口2 |
| 8 | — | — | — | 75.588 | 0.8 | 7～10 | 44～60 | — | — | — |
| 9 | (252.1) | 12.51 | 19.56 | 75.523 | 1.5 | 3～8 | 39～65 | 3～7 | 44～57 | — |
| 10 | (146.3) | 8.37 | 17.86 | 75.519 | 1.1 | 3～4 | 45～58 | 3～7 | 29～56 | — |
| 11 | — | — | — | 75.485 | 1.2 | — | — | 3～6 | 38～69 | 水口3 |
| 12 | — | — | 3.71 | 75.540 | 0.3 | 1～4 | 43～58 | — | — | — |
| 13 | 30.0 | 8.79 | 4.40 | 75.512 | 1.2 | 3～8 | 43～61 | 3～6 | 45～62 | — |
| 14 | — | — | 3.59 | 75.495 | 0.6 | 3～6 | 32～54 | 4～5 | 50～58 | — |
| 15 | — | — | — | 75.582 | 0.4 | 0～1 | 53～66 | — | — | — |
| 16 | (51.6) | (9.06) | 6.32 | 75.561 | 1.0 | 1～3 | 58～87 | — | 43～45 | — |
| 17 | — | — | 6.55 | 75.506 | 0.6 | 3～7 | 52～89 | 2～4 | 50～71 | 水口4 |
| 18 | — | — | 11.75 | 75.564 | 0.7 | 1～2 | 54～64 | — | — | — |
| 19 | (94.2) | 7.81 | 12.85 | 75.517 | 0.7 | 2～6 | 40～58 | 2～5 | 62～92 | — |
| 20 | — | 3.89 | — | 75.478 | 1.6 | — | — | 1～7 | 65～90 | — |
| 21 | — | — | — | 75.456 | 1.3 | — | — | 3～8 | 64～90 | — |
| 22 | — | — | 5.30 | 75.571 | 1.6 | 0～1 | 68～92 | — | — | 南北坪境畦畔 |
| 23 | 72.0 | 7.49 | 4.79 | 75.541 | 1.1 | 0～1 | 92～98 | 0～3 | 62～109 | 南北坪境畦畔 |
| 24 | 42.3 | 4.50 | 4.78 | 75.520 | 0.7 | 1～5 | 66～86 | 0～2 | 67～100 | 南北坪境畦畔 |
| 25 | 52.5 | 5.13 | 4.92 | 75.496 | 1.8 | 1～4 | 68～81 | 1～2 | 50～86 | 南北坪境畦畔 |
| 26 | — | — | 1.31 | 75.472 | 1.0 | 1 | 70～77 | 0～1 | 67～85 | 南北坪境畦畔 |
| 27 | — | — | 2.38 | 75.460 | 1.0 | 0～1 | 46～50 | 0～3 | 62～76 | — |
| 28 | — | — | 1.74 | 75.453 | 0.2 | 1～2 | 47～52 | 1～3 | 74～81 | — |
| 29 | — | — | 12.15 | 75.567 | 1.2 | 0～1 | 49～68 | — | — | — |
| 30 | (91.8) | 9.10 | 11.90 | 75.523 | 0.9 | 0～1 | 44～65 | 0～1 | 62～76 | — |
| 31 | (57.4) | 5.22 | 11.92 | 75.491 | 2.5 | 0～2 | 44～71 | 0～2 | 48～81 | — |
| 32 | (64.9) | 4.92 | 12.49 | 75.490 | 2.4 | 1～2 | 40～50 | 0～2 | 68～105 | — |
| 33 | — | — | — | 75.468 | 0.8 | 1～2 | 46～54 | 0～1 | 43～58 | — |

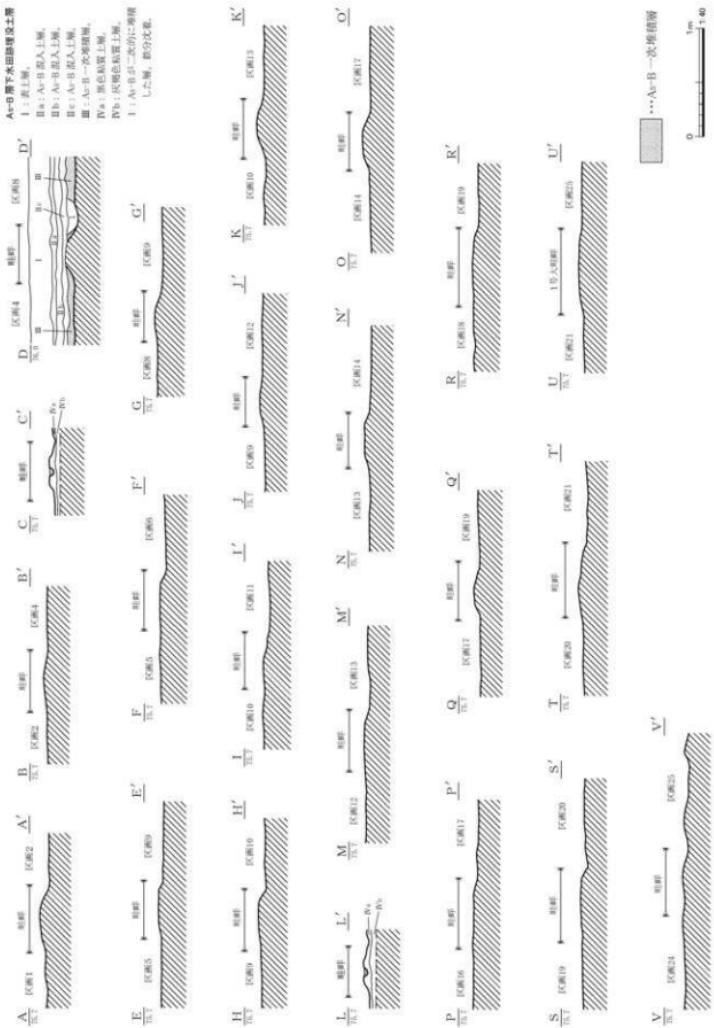


<計測凡例>

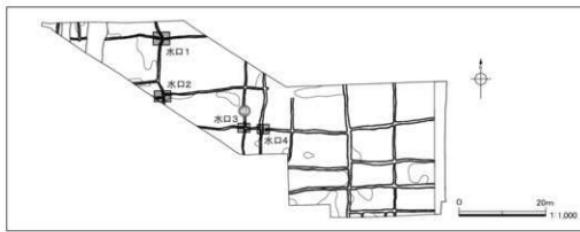
- ・面積は畦畔下端線の範囲、田面比高は同一区画内の最大値、畦畔高は田面と畦畔の比高を示す。
 ・各区画の畦畔については、南北畦畔は区画の西側、東西畦畔は区画の北側に位置するものを指す。畦畔の軸長・幅は、水田面と接する下端で計測した。



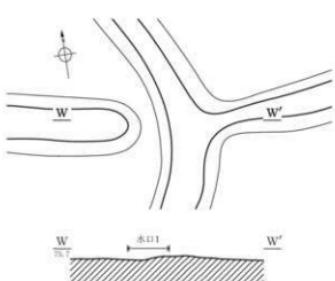
第6図 As-B 滲下水田跡 平面図



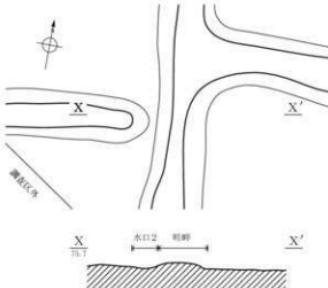
第7図 As-B層下水田跡 畦畔



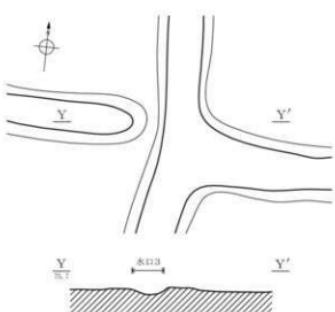
水口 1



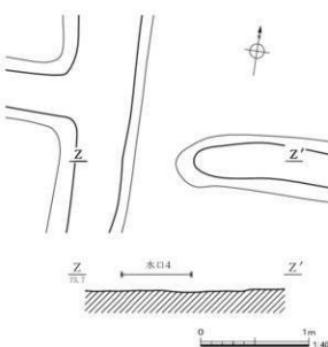
水口 2



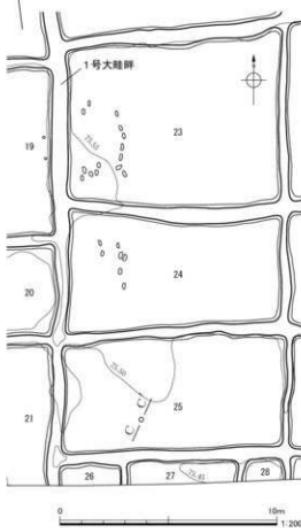
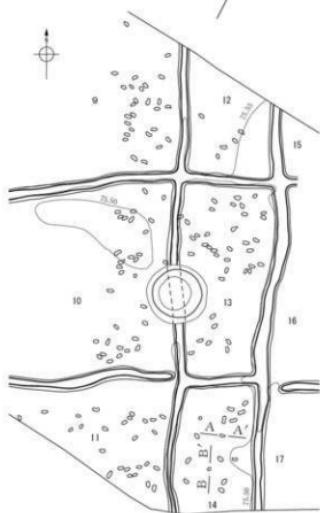
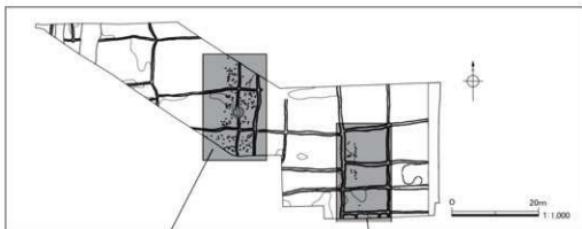
水口 3



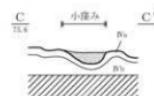
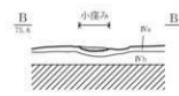
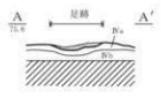
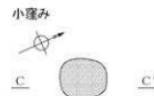
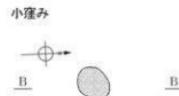
水口 4



第8図 As-B層下水田跡 水口



足跡



■ ...As-B一次堆積層

0 1m 1:20

第9図 As-B層下水田跡 足跡・小窪み

VI まとめ

今回の調査では、As-B 軽石層直下の水田跡を検出することができた。As-B 層下の水田跡には、「条里地割」と呼ばれる一町（約 109 m）四方を単位とする方格地割が認められる。本遺跡を含む前橋台地南部地域の As-B 層下水田跡では、広範囲に及ぶ発掘調査事例の蓄積により、条里地割に基づいた水田造営を行っていることが判明している。以下では、これらの事例を踏まえ、調査成果を概観していきたい。

水田面には様々な痕跡が残されており、これらは水田区画ごとに微妙な違いが見られる。本遺跡の水田面では、多数の小さな凹凸が確認された。本文中に記したように、この凹凸の深さに着目して大別すると、①凹凸が浅く高低差 1 cm 以下の区画（写真 1）、②凹凸が深く高低差 2 ~ 5 cm ほどの区画（写真 2）、③凹凸の高低差が 1 ~ 3 cm ほどで①と②の中間的な区画（写真 3）の 3 種類に分けられる。また、これらの水田面を囲う畦畔を見ると、①の畦畔は 4 ~ 10 cm と高さがあり、盛り上がりが明瞭に捉えられる。対して、②の畦畔は 3 cm 以下と低く、形も崩れ水田面との区別がつけ難い。③の畦畔はこの両方がある。分布状態を見ると、南北方向へ走行する 1 号大畦畔を境として西側に①が、東側に②が展開し、③は両側で確認される（第 11 図）。

古代の水田耕地については、全てが耕作田であったのではなく、休耕田および耕作放棄されていた水田が広範に存在していたことが、文献史学の立場から明らかにされている（戸田 1969）。また、高井佳弘氏により、群馬県下の As-B 層下水田における休耕田の存在が指摘されている（高井 2006）。

そこで、本遺跡における As-B 層下時の景観復元を試みると、①は凹凸が浅いことから、全体的に風化が進んでいたと考えられ耕作が放棄された休耕田と推測される。同様な状態の水田区画は、近接する南部拠点地区遺跡群 N.5 の 1・4 区でも検出されている。すなわち、などらかで、凹凸があつてもごく浅い面で、畦畔は比較的高く残っている。ここでは、畦畔を踏み潰し、区画に対して斜めに歩行する足跡列（第 10 図）の存在から、As-B 層下時には水田として利用されていなかった可能性が高いと判断された（前橋市教育委員会 2010b）。この事例は①を休耕田とする考えの補強となろう。②は田の水を管理する重要な土壌である畦畔が、低く崩れた状態で



写真 1 ①凹凸が浅い水田面（区画 9）

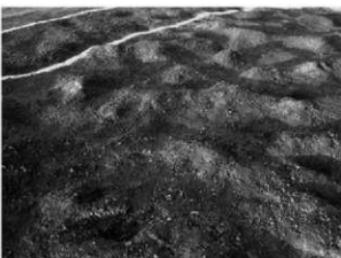


写真 2 ②凹凸が深い水田面（区画 25）

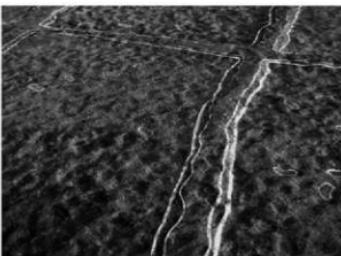
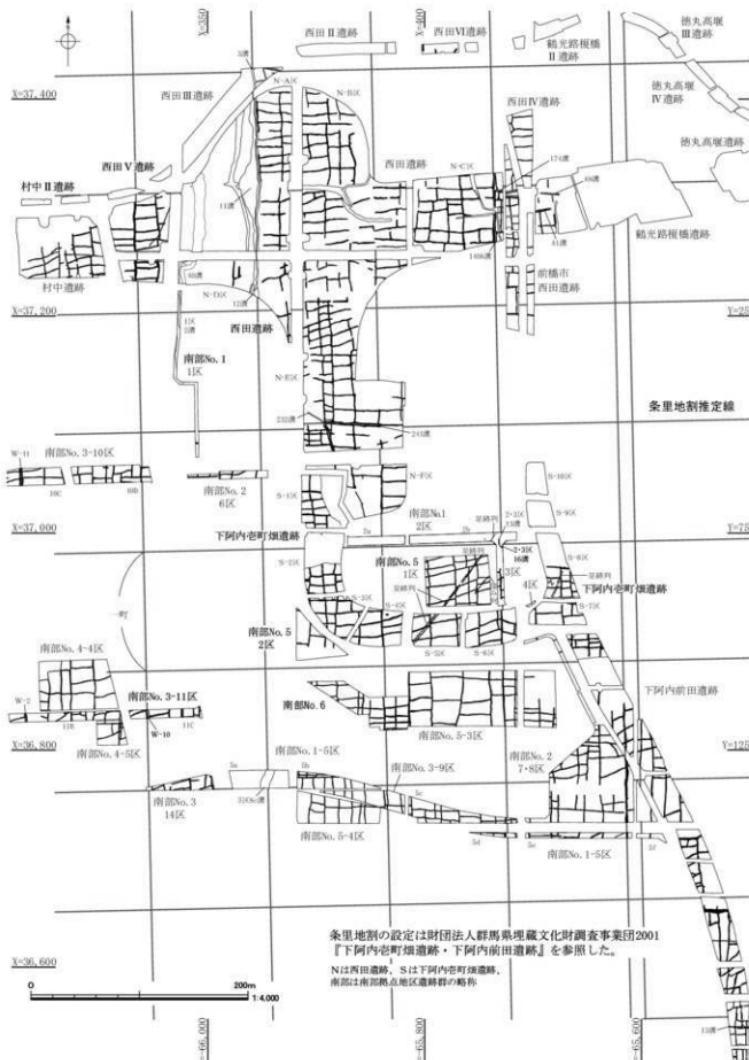
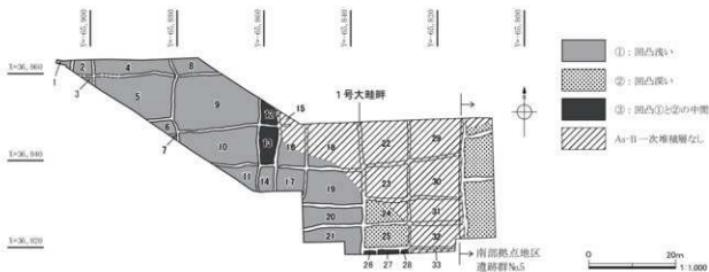


写真 3 ③凹凸が①と②の中間的な水田面（区画 12）



第10図 本遺跡周辺のAs-B層下水田跡



第11図 As-B層下水田面の状態

あったことから、やはり As-B 降下時には水田として利用されていなかったと推測される。③は小形の区画で確認されているが、畦畔の状態は高低両方あり、どの様な状態であったかの判断は難しい。

以上のように、本遺跡の水田は、その大半が休耕田であったと推測される。①と②が同じ休耕田でありながら、凹凸の深さや畦畔に大きな違いが見られるのは、耕作が放棄されてから As-B が降下するまでの期間の差に因ると考えられるのではないだろうか。本遺跡の成果が、古代の水田利用形態解明の一助となれば幸いである。

主要参考文献

- 前橋市教委 2010a 「南部拠点地区遺跡群No.4」
 前橋市教委 2010b 「南部拠点地区遺跡群No.5」
 前橋市理文 1996 「古伊豆遺跡」
 前橋市理文 1997 「古伊豆中田遺跡」
 前橋市理文 1997 「古伊豆光圧跡」
 前橋市理文 1998 「古伊豆遺跡」
 前橋市理文 1998 「古伊豆中原山遺跡」
 前橋市理文 1998 「横手湯田遺跡・西田II遺跡」
 前橋市理文 1998 「横手湯田遺跡・徳丸仲田II遺跡・西善尺司II遺跡・下増田越渡III遺跡」
 前橋市理文 1998 「横手湯田IV遺跡」
 前橋市理文 1999 「横手湯田V遺跡」
 前橋市理文 1999 「横手湯田VI遺跡」
 前橋市理文 1999 「横手高堰II遺跡・徳丸仲田III遺跡・西善尺司遺跡・下増田高堰II遺跡・下増田越渡IV遺跡」
 前橋市理文 2000 「横手湯田VII遺跡」
 前橋市理文 2000 「横手高堰III遺跡」
 前橋市理文 2001 「横手湯田VIII遺跡」
 前橋市理文 2001 「横手湯田IX遺跡・徳丸仲田IV遺跡」
 前橋市理文 2001 「横手鉢田遺跡」
 前橋市理文 2001 「横手鉢田II遺跡」
 前橋市理文 2001 「村中II遺跡・西田V遺跡」
 前橋市理文 2001 「横手VI遺跡」
 前橋市理文 2004 「御宇宮田日遺跡」
 前橋市理文 2004 「横手高堰III遺跡」
 前橋市理文 2005 「高里油免II遺跡」
 前橋市理文 2009 「南部拠点地区遺跡群No.1」
 前橋市理文 2009 「南部拠点地区遺跡群No.2」
 前橋市理文 2010 「南部拠点地区遺跡群No.3」
 玉村町教委 1999 「古伊豆遺跡」
 玉村町教委ほか 2000 「田口下籠敷遺跡」
 玉村町教委ほか 2002 「天神前遺跡 大明神遺跡 北小路遺跡」
- 玉村町教委ほか 2003 「天神前II遺跡」
 玉村町教委 2007 「砂町遺跡(第1~3次調査)・尾硝町II遺跡・中之坊遺跡」
 群馬県教委 1982 「須原遺跡・東平田古墳」
 群馬県教委 1983 「須原野遺跡・下佐鳥遺跡・宿内古城跡」
 群馬県理文 1987 「下平田・浅川A遺跡 浅川B・C遺跡」
 群馬県理文 1997 「柳原川端遺跡・公田東遺跡・公田池尻遺跡」
 群馬県理文 1999 「上境川反傾遺跡」
 群馬県理文 2001 「下平内邑町須原跡・下阿内前田遺跡」
 群馬県理文 2001 「鬼里平塚遺跡・横手早稲田遺跡・横手早稲田遺跡・手南川端遺跡」
 群馬県理文 2001 「鬼里尺司遺跡」
 群馬県理文 2001 「赤木井付田遺跡(1) 調査時代幕開創期編」
 群馬県理文 2001 「宿根手三波川遺跡」
 群馬県理文 2001 「宿根手三波川遺跡・横手早稲田遺跡」
 群馬県理文 2002 「宿根手三波川遺跡・横手早稲田遺跡」
 群馬県理文 2002 「赤木井付田遺跡」
 群馬県理文 2002 「高里油免II遺跡」
 群馬県理文 2002 「上境河町北道跡・上境II遺跡」
 群馬県理文 2002 「西田II遺跡・竹中II遺跡」
 群馬県理文 2002 「横手湯田III遺跡・横手湯田遺跡」
 群馬県理文 2005 「赤木井頭遺跡」
 群馬県理文 2011 「谷筋II遺跡」
 前橋市史編さん委員会 1971 「前橋市史」第1巻
 群馬県史編さん委員会 1996 「群馬県史 通史編」第1巻
 高崎市史編さん委員会 2005 「高崎市史 通史編」第1巻
 高井佳弘 2006 「平安時代後期水田耕作の一様相」『生業の考古学』同成社
 戸田芳実 1969 「中世初期農業の一特質」『日本領主制成立史の研究』岩波書店
 町田 洋・新井房夫 1992 『火山灰アトラス』東京大学出版社

前橋市教委は前橋市教育委員会、前橋市理文は前橋市埋蔵文化財発掘調査課、玉村町教委は玉村町教育委員会、群馬県教委は財团法人群馬県埋蔵文化財調査委員会の略称である。

写 真 図 版



A-5-B 廙下水水田跡の調査風景（北東から）

図版 1



調査区全景（上が北）



As-B 層下水田跡（南西から）

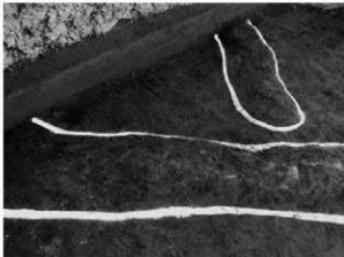
図版 2



As-B 層下水田跡 区画 20 (西から)



As-B 層下水田跡 南北坪塙畦跡 (北から)



As-B 層下水田跡 水口 2 (北東から)



As-B 層下水田跡 水口 3 (北から)



As-B 層下水田跡 東西畦畔全景（西から）



As-B 層下水田跡 東西畦畔全景（西から）



As-B 層下水田跡 南北畦畔近景（北から）



As-B 層下水田跡 南北畦畔近景（北東から）

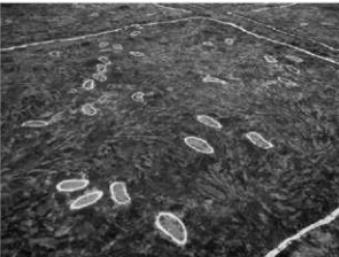


As-B 層下水田跡 南北畦畔近景（南東から）

図版 4



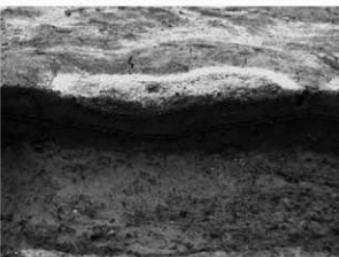
As-B 層下水田跡 区画 14 足跡検出状況（北東から）



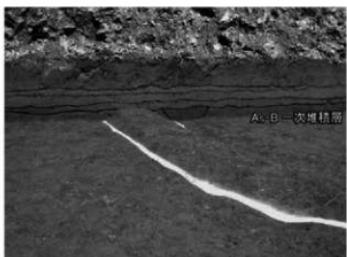
As-B 層下水田跡 区画 13 足跡検出状況（南東から）



As-B 層下水田跡 足跡近景（東から）



As-B 層下水田跡 足跡断ち割り（南から）



As-B 一次堆積層

As-B 層下水田跡 南北畦畔断面（南西から）



As-B 一次堆積層

基本層序（南から）



作業風景（南東から）



作業風景（北西から）

抄 錄

| | |
|--------|---|
| ふりがな | なんぶきよてんちくいせきぐんNo.6 |
| 書名 | 南部拠点地区遺跡群No.6 |
| 副書名 | 前橋市南部拠点東地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書No.6 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | |
| シリーズ番号 | |
| 編著者名 | 神宮聰 福田貫之 有山怪世 |
| 編集機関 | 有限会社毛野考古学研究所 〒379-2146 群馬県前橋市公田町1002番地1 TEL 027-265-1804 |
| 発行機関 | 前橋市教育委員会ほか 〒371-0018 群馬県前橋市三俣町2-10-2 TEL 027-231-9531 |
| 発行年月日 | 西暦2011(平成23)年9月30日 |

| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 面積 | 調査原因 |
|-------------------|-----------------|-------------|-----------|------------|-------------------------------|----------------------|---|
| 南部拠点地区 遺跡群No.6 | 群馬県前橋市 新堀町地内 | 市町村 遺跡番号 | 36°32'98" | 139°09'99" | 2011.03.07 ～ 2011.03.27 | 1,832 m ² | 前橋市南部拠 点東地区土地 区画整理事業 |
| | | 10201 22673 | | | | | |
| 所収遺跡 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 |
| 南部拠点地区 遺跡群No.6 | 生産 | 平安時代 | As-B層下水田跡 | | 土師器、須恵器、 陶磁器 | | 条里地割に基づ いて造営された 浅間B軽石層直 下の水田跡。 |

南部拠点地区遺跡群No.6

前橋市南部拠点東地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書No.6

平成23年9月22日 刊刷

平成23年9月30日 発行

前橋市教育委員会
株式会社ペイシア
有限会社毛野考古学研究所

印刷／朝日印刷工業株式会社

